

学生参加の大学づくりとピア・エデュケーション

古くて新しい課題としての「学生参加」

小倉 浩幸

立命館大学文学部事務局

□ はじめに

「学生参加型」とは
どういう課題なのか

学生参加型の授業が求められている。学生たちは、大学で多くの違った価値観をもった学生たちとの

交流を求め、大学教師とのコミュニケーションを求めている。新入生が参加する一泊二日の合宿研修（フレッシュマン・リーダーズ・キャンプ）での、「同じ新入生でもいろいろな考え方の違う人がいることが分かり、おもしろかった。大学生活が楽しくなりそうだ」という感想は、多くの新入生に共通する感想だ。世間では「学力低下」がいわれ、

学生たち自身もそう思っているようだが、知的な刺激を強く求めてもいる。高い学費に見合った授業であるかどうか、授業に対する「満足度」は、その指標が大学教育をはかる「ものさし」として適切かどうかは別として、学生の授業に対する「参加実感」（別の言い方をすれば、それこそが「学習実感」と言えるかもしれないが）と比例的な関係があるように思われる。

かくして、大学改革をめぐる論点は、一方では少子化のなかで国際的競争時代に突入し、それにふさわしい大学の個性化戦略（競争的環境のもとでの大学づくり）を突きつけられ、もう一方では、学生に「力」をつけさせることの

できる授業改善（およびそのための客観的な評価の制度導入）が問われる、という構造になっているのではないかと捉えている。

この議論の中では、大学事務職員の学生に対する役割は見えてこない。長期的な経営戦略を企画するスタッフ、あるいは、大学教務事務の質的な転換などは論点になるかもしれないし、それはそれで重要な論点だが、学生の成長と関わる場が授業に特化されるような議論では、その点での大学事務職員の役割は副次的にならざるを得ない。また、個々の授業のレベルのみで学生参加を考えるのも限界がありそうに思われる。古くはKJ法から今日的にはWebを利用した双方向やPOWER POINTによるプレゼンテーションなども含め、IT化やかつてのマルチメディア

おぐら・ひろゆき●一九六九年、京都府生まれ●論文として、「学生の自主的・集団的活動の特徴」（『立命館大学教育科学研究』第九号）、「学生の『学びと成長』に職員がどう関われるか」（『大学と教育』第二十三号）など●文学部事務室の課長補佐として、学生の履修や学籍を管理し、学習・学生生活・進路などにかかわる相談対応を行う「学生生活支援グループ」を統括しつつ、補導、インターンシップ指導、学生団体指導などを担当している。

型教育といったテクニカルな授業技術も向上させることは重要だが、学生たちは、授業で回収するミニ・レポートやコミュニケーション・ペーパーに対して次回の授業でコメントするというアナログな方法でも、案外、高い満足度を示すものである。こうなると、「学生参加型教育」とは、授業技術向上の問題とは少し違う次元の話のような気がする。学生が「学び」「成長する」ことが大学における教育の課題であるとする、大学における「教育」とは、もっと大きく、多様な形で捉える必要があるのではないか。

今日的な

大学自治問題

としての学生参加

大学事務職員が、大学教育における学生参加のありようを考えるとき、学生参加のありようを考えるとき、創造性を発揮するには、大学全体が学生にとつての教育的な場（学生自身が学び成長できる場）であろうとすることが大切だと考える。大学職員が見た「学生参加」とは、個々の授業のレベルでどうするかというレベルに留まらず、大学教育づくりに学生が参加する、そのあり方が、今日、古くて新しい課題になっていると思われる。

これまで、大学教育づくりへの学生参加とは、大学自治の一態様としてどう位置づけられるかという議論ではなか

ったかと思う。本稿では、筆者が担当している立命館大学文学部事務室での学生生活支援業務を通じて接している学生実態をベースに、大学教育づくりへの学生参加のあり方について、日頃の業務を通じての「実感」から考えていることを紹介して、「学生参加型教育の課題」をめぐる議論に「参加」したい。

□ 学生自治会の取り組みに見る「学生参加型教育」

歴史的な

学生大会の成立

立命館大学の文学部は、学生数が五千人の大きな学部である。文学部学生自治会の最高意思決定機関である学生大会は、規約によれば、会員（学生）数の七分の一が定足数だから、七百人以上の学生が参集してはじめて成立する。そして、「自治離れ」といわれている風潮のとおりなのか、一九九一年以来、十一年間、成立していなかった。それが、二〇〇二年六月二十八日の文学部学生大会は、会場である、立命館大学で最大の収容数をもつ千人教室が、満席どころか、二百人を超える立ち見もあるほどの大盛況で成立したのである。

この学生大会成立の要因については、さまざまな角度から分析・検討されるべきであるが、最も主要な要求あるい

は不満という点から見ると、授業十五週実施に伴う学生生活の超多忙化、生活時間の大半を占める大学での施設環境面での整備の遅れ、そして、高学費との矛盾の三点が主要な要求であり、これらが学生の気分と深く一致した点にあるうと思われる。とりわけ、セメスター授業十五週の完全実施を貫徹するため、月曜日授業の確保による祝日の授業実施を行い、休講については必ず補講を行うようにしたことは、大学としては、必要な授業回数を確保する措置であったが、学生にとっては、祝日の授業や本来の授業時間とは異なる時間に行われる補講は、多忙化している学生実態からみれば、きわめて大きな問題であった。学生にしてみれば、授業の回数で学生の学力を確保しようとするものがあり、学生の実態や要求に基づいた授業改善をなおざりとする、本末転倒の教育改革としか映らなかった。

学生大会に見る

学生の「学び」の要求

教職員の実感から見れば、必ずしも同意されない方もおられるかもしれないが、学生の学びの要求は、きわめて強い。文学部の学生大会出席者が寄せた三百あまりの感想文を見ても、授業や学びに関わる記述欄には、非常に具体的で切実な意見や要求が寄せられている。とりわけ重要であると思われるのは、講義・演習といった授業の

形態や教室の規模に関わらず、「一方的に先生が講義するのではなく、もっと学生が参加するような授業をしてほしい」や、「学生が自主的に調査したものをみんなで討議するような機会をつくってほしい」といった声が共通している点である。テストやレポートは、採点が済んだ後、添削して学生に返却することを求める意見も強い。双方向型、グループワーク、評価のフィードバックなど、さまざまなかたちでの学生参加を求めているのである。

これらの課題を正面から据えて取り組んだ自治会執行部の学生たちは慧眼であったと思う。個々の学生から寄せられる「学び」の要求を学生全体に返して多くの学生の共通する課題とし、その改善・前進のために学生から問題提起できることは何かという議論を組織していった。社会の第一線で活躍する卒業生を呼んで、文学部での学びと進路について考える講演会を行ったり、先輩学生が新入生の相談にのることができるよう、「履修相談プロジェクト」を結成して専攻ごとの学び方についての懇談会を実施したり、スクールカウンセラーをめざす学生たちのための講演会など、学生生活と学び、そして進路を考える取り組みを重視しているのがわが文学部の学生自治会なのである。

ともあれ、学生大会での要求を見るだけでも、学生は、

授業への「参加感」をきわめて強く求めている。他方、教える側の気分としては、自主的に課題を追究したり、討論に積極的に参加してこない学生「実態」を知っているのであり、「そういうなら、もっと授業で元気に参加してほしい」ということになる。「学生参加型教育」を、どのようなものとして捉え、どのように進めていくのかは、このギャップを説明する必要があるということになる。

学生にとつての
ところで、「キャンパス全体が学びと成長の場」であるとしたとき、学生に

「学びの実感」

とつて、学びと成長の実感は、どこにあるのか。学部（学部教学の特性、学生の関心、履修制度の構造など）によつて多少異なる傾向はあるが、一九九九年度に、立命館大学の大学教育開発・支援センターと株式会社ベネッセ・コーポレーションとで共同研究として行った「学生の『学び』の意識と満足度に関する調査」によれば、「大学での『したい度』と『力を入れている度』では、いずれも第一は「友人との交流」であった（『したい度』八六・七％、力を入れている度三四・一％）。「『したい度』では、これに「趣味・旅行」（八二・八％）、「正課授業」（六一・五％）、「資格取得」（五九・九％）、「クラブ・サークル」（五九・二％）の順に続き、実際に「力を入れている度」

では、「趣味の活動」(三一・八%)、「アルバイト」(二二・〇%)、「正課授業」(二〇・四%)、「クラブ・サークル」(一九・〇%)、「資格取得」(一八・五%)の順位となっている。「友人との交流」が共通して高く、「趣味の活動」がこれに続く。そして、理想としては正課に力を入れたいが、現実としてはアルバイトを優先しないとけない事情がある。資格も取得したいが、先延ばしにしておく。そして、意外と課外活動は低いのである。七割の学生が何らかの課外活動に参加しているのにもかかわらず、である。

では、「満足度」という点からみたらどうなるのか。満足度そのものを尋ねている設問が、残念がらなかった中で、代わりの項目として、自分にとって「良い意味で最も自分に影響を与えている活動分野を問うた項目でも、やはり「趣味・交遊」が圧倒的に高く(二九・六%)、アルバイト(一三・六%)、専門学習(一三・〇%)、課外活動(一一・一%)と続いている。これがさらに卒業生が学生生活振り返ったときにどうなるのか。「大学在学中の活動の中で学習や経験したことについて、生活や仕事で生かされていると思うもの」という問いに対し、「これは「専門科目」が圧倒的に高く(一七・九%)、ついで「課外活動」(一五

・一%)、「学外での活動」(一二・二%)と続いている。(二〇〇一年度立命館大学学生実態調査プロジェクト・中間まとめ)

アンケートの項目が適切に設定されているかという問題や、在学生と卒業生の対比ができるような設問になっていないなどの問題があり、正確な分析は、このデータではできないが、いくつか仮説的にいえそうなのは、①全体的にあって、「趣味の活動や友人との交流」が最も重要な価値であり、最も力点もおいていること、②(意外と?)正課の授業に対する意識は高いこと、③(これも意外と)課外活動に対する意識が低いこと、等が挙げられる。大学事情やその他の諸条件、調査方法などにより、結果が変わるかもしれないが、いずれにせよ、「大学の常識」や「あるべき大学のあり方」とのギャップは感じざるを得ない。

正課・課外の 枠組みをこえた

「学びと成長」の場を

おそらく、個々の学生にとっては、生活時間の配分と、配分された時間の「重み」のようなものがあって、その関係において、学生生活における力点や関心を測ることができ、その差異を前提に満足度を問わねばならないのではないかと思う。逆にいうと、個々の学生にとっては、その時々において「今、自分

にとつて一番大事なこと」というのがあり、それとそれに対する大学からの手立て（制約も含め）とのかかわりが満足度を規定するとも言えよう。サービス・マネジメントの観点から言えば、大学として学生にできるサービスを明らかにし（限定し）、その限りにおいては学生の便宜をもつとも考慮することが必要ともいえるが、これは、学生も大学づくりの主体として位置づけ、育成する観点とは異なる。学生が、キャンパスや学生生活（その延長も含め）において、「自らの意思として自ら学びの場をつくって活躍できるとも思うのである。」が重要なのではないかと

立命館大学文学部は、昨年度より正課科目（専門）としてインターンシップを位置づけ、本年度は十一クラス七十名近くが参加している。来年度はさらに増やしていく予定であるのだが、女子学生を中心に、意欲的に取り組まれている。地域の文化資源の再発見・活用提言や不登校生徒・青年への支援と居場所づくりなどの文学部らしいものもあれば、地理情報技術を活用した地域政策コンサルティングなどの専門度の高いもの、さらに、銀行や政治家秘書、アートイベント会社の企画運営など、実に多彩な分野に挑戦しており、実習期間も、年間通して行われるものや、二ヶ月

間休みなしの実習にも、少しは息切れしつつも、がんばっている。そして、インターンシップ体験者の多くは自らの体験と成果を積極的に発信し、その他の学生生活の場面でも発揮しようとしている。これらについても、まとまって紹介できるだけの内容があるが、紙幅の関係上、本稿ではこれ以上紹介しないが、一般に、学生に元気がないといわれがちな文学部の学生において、これらのような意欲的な学生たちがいる。このことから、教育のあり方に関わる教訓を導き出すことができなだろうか、というのが現在の問題意識の一つとなっている。

□ 今日のな青年期のありようと大学教育

学生実態と

「青年期教育論」

大学における「学生参加型教育」を考へるとき、もう一つ重要な論点があると考えている。それは、学生の発達をめぐる問題である。

筆者が所属する立命館大学においては、一九八〇年代の前半より、教学改革をすすめるに当たって、「青年期教育論」という観点を重視してきた。これは、「全学協議会」という、理事会（大学）と学友会（学生自治組織）、院生協議会（院生自治組織）、教職員を代表して教職員組合が、学

園の重要な問題を協議する場において、一九八三年度に議論された問題である。

「共通一次試験や後期中等教育の『多様化』、能力主義的種別化、学校の管理強化などをつうじて進行している学校の序列化などが、学生の発達過程にゆがみや影響をおよぼし」「学生生活のあり方についても、コミュニケーションや読書、アルバイトや消費生活の諸変化が顕著にあらわれ」ているが、そのなかに「学生の自立の要求や潜在的力が蓄積されていることを正しく見ていくなど教育的視点にたつことが重要」ということが強調された。そして、学生実態把握の視点として、「①今日の学生を経済・教育・文化・社会・イデオロギー等の、社会の諸関係の中でとらえること、②厳しい受験期をくぐりぬけた青年としての自立の過程にある存在としてとらえつつ、大学における学ぶ主体としていかに確立させるかという視点が重要であること、③（正課、クラス活動、課外活動、就職活動の）四つのファクターをふまえ、アルバイト実態などの実情に照らして学生生活を総合的かつ有機的にとらえること、④学生は大学自治を担う大学構成員として、学生生活を発展させつつ、大学づくりに参加していく視点が重要である」との確認を行っているのである（一九八三年度立命館大学全学

協議会確認文書）。

社会の諸関係、とくに、経済・社会状況にとどまらず、初等・中等教育との連関のなかで大学教育をとらえて、自立する過程の青年学生像をふまえ、人格・発達論や青年期論を踏まえた大学教育づくりの重要性を確認したのは、今日においても重要な問題指摘であると思う。

この青年期のありようが大きく変わってきている現実があり、これが、従来の大学のしくみや授業のすすめ方では対応できなくなっているのではないか、という問題があるのではないか。今日、以前にも増して、学生実態から大学教育のあり様を考えてみる必要に迫られていると思われる。

発達課題を

積み残してきている

学生たち

「こころ」に課題・困難を抱えた学生が、近年、急速に増加しているということは、多くの大学の学生相談を担当している教職員は日々実感していることであり、授業や窓口の対応等をつうじて、少なくとも教職員も感じていることであろう。また、学生が全体的に幼稚化しているとの感想を持つ教職員も多いかと思う。科学的な分析、分類は、専門の研究者にお願いしたいが、日々の業務での実感を通して、以下のような

傾向を挙げることができる。

まず、集団への不適応が挙げられる。立命館大学では、一回生からゼミ（小集団授業）を全学的に導入しており、グループワークを位置づけている。この作業に参加できない学生が、少なからずいる。特に、心理学専攻は、自身の「こころの問題」を通じて心理学を学びたいのだが、心理学研究の基本となる対人調査ができないというケースも見られる。学習意欲が低くてサボるといったことではなく、集団にとけこんで活動するということを、きわめて苦手とするものである。

これと関連するのが、対人コミュニケーションの未成熟や偏りという以下のようなケースである。クラスに嫌いな人間がいるので所属する授業クラスを変更してほしいという相談や、嫌がらせをする学生がいるので、大学として厳しく指導・処分してほしいという相談もあった。学生サポートルーム（学生相談室）が主催した「恋愛講座」では、講師をつとめた教員が自分の恋愛経験を紹介した折、参加した学生から、「メールがなかった時代って、どうして恋愛なんてできたんですか？」という、笑っていいのかどうか分からないような質問も出ている。女子学生が自転車で交通事故にあうケースも増加している（男子学生はバイク

事故が多いが、これは横這い状態）が、事故のもう一方の当事者と示談をすすめる場合や警察・病院あるいは保険の相談など、普通は本人か家族がすすめるものだと思うのだが、私が対応している経験では、ほとんどすべてに近い状況で、この役割は「彼氏」が果たしている。ダメだとは言わないが、交通事故に遭ったことを家族には言わず、「彼氏」との関係だけで対処しているのが気にかかる。そういう、*「彼女は交通事故にあって動けないが、大学を休みたくはないというので、車椅子を大学で用意してほしい」*と、彼氏が学部事務室から学生センター、保健センターなどを駆けずり回ったということもあった。

学習面でも新しい傾向として考えているのが、成績評価をめぐる問題である。立命館大学文学部では、学部教学の集大成として、卒業論文を必修科目として位置づけているが、この数年、卒業論文のレベル低下を危惧する意見があり、「アカデミック・リテラシー」を低回生で充実させる必要性が議論された。これを受けて、一回生時にライティング科目を設け、学生のレポートを添削してフィードバックする取り組みを開始した。すると、レポートの書き方のトレーニング科目であるにも関わらず、その科目で「良い点」を取ることができるために、その授業の事前に、レポ

トの上手な書き方を教えてほしいという相談が増えていくのである。

学生たちに学生生活の状況を探ねると、一様に「とても忙しい」と応じる。経済的事情から、遠距離通学の学生が増えているが、それでも朝一番の授業からキチンと受講して、夜の六・七時限まで授業を入れていたり、資格取得のための課外講座を受講したりしている。課外活動への参加率も相変わらず高く、全学生の七割近くが何らかの課外活動に参加しているだけでなく、三つ、四つとサークルを掛け持ちし、さらに自治会活動にも参加したり、インターンシップに参加するという学生も少なくない。そして、あまりの多忙さに、週末は体調を崩してしまうとか、ひどい場合には精神疾患を発症してしまった、というのもまれではない。

学生の発達を

めぐる社会状況

親との関係も難しくなってきた。ひきこもりがちな自分の子どもに代わって履修相談に来たというのもあったが、こういうのはともかく、自分の子どもは何の問題もないのに、自分が心配なので履修相談に来た母親がいた。その一方で、大学生になったら自立するものだと機械的に対応して、五回生時の学費督促の段階ではじめて卒業してい

ないことを知り、実は一回生の最初からずっとひきこもっていて大学に来たことはなかったということに気付いたというのが数件あった。親にしてみれば、四年間、子どもから連絡がなかったというのは、自立してがんばっているから、だからかえって連絡してこなかったのだと思ひ込んでいたケースである。これに近い例は多々ある。

複雑な社会・経済状況も反映して、家庭内暴力や義理の親との葛藤、ストーカーの加害・被害、自殺癖や自傷行為など、学生相談事項は複雑・高度になり、以前の「五月病」などは、むしろ聞かれなくなっている。「大学合格」がゴールであり、入学後に目標が見つからずにいるというケースはあるが、とりあえず、大学でも良い成績をとるという目標があり、その構造のくり返して、進路に目が開かれないうことがあっても、多くの教職員の実感であろう。

この小論は、学生の心理面に関わるケース研究ではないから、これ以上は述べないが、精神疾患や心理面での困難を抱えた学生がふえており、それだけではなく、コミュニケーションや社会生活のレベルでは、広範な学生が、全体として、あきらかに変化してきていると実感している。それでいて、大学を卒業した後、どういう進路を選択しているのか、そのための準備をどうするのか、絶えず問われ

る環境にあり、その点では以前と変わらぬ葛藤がある。エリクソンなどが言う発達段階に照らして言うと、青年期後期にある今日の青年学生たちは、青年期の前期や中期の発達課題を積み残しながら、青年期後期の発達課題にも直面しているということが、今日の青年期のありようではないかと思う。

学生の多様化と

ユニバーサル・アクセス

学生の多様化は、前項で述べたように発達段階の面で新しい様相を呈してきているが、これらともかわかって、価値観やライフスタイルの面での多様化という状況もある。環境にやさしいエコロジカルな学生生活の追求というような話は、かなりのところで広がってきていると思うが、私のところで最近、取り組んでいるのは、「性の多様性とその尊重」というテーマである。事の発端は、大学が義務づけられている健康診断の受診率を向上させるため、その徹底を図ったことで、これに困った「性同一性障害」を自認する学生が、身体面だけで男女と機械的に区別されても、それに困る「性」があるのだということ、教授会と学生自治会との交渉の場で、「多様な学生の切実な要求」として問題提起してきたことにある。そしてその勇気にひかれた学生たちが、キャンパスに

おけるセクシャル・ハラスメントの問題を、「多様な性」のあり方や「性の自己決定」の尊重などの視点を重視して取り組み、学習と啓発のプロジェクトを結成し活動している。学部をこえてさまざまな研究分野の教員にアプローチし、自らのテーマを多様な角度で研究している。

身体障害のある学生をサポートしようという学生の動きも活発である。身体障害のある学生が学びやすい大学・学習環境の整備のために、自主的勉強会やキャンパス調査を進めている。そして、身体障害者にやさしい「バリア・フリー」の観点から、いろいろな条件の学生に対応できるように「ユニバーサル・デザイン」の観点にいたるようになる。

こういう取り組みに、主体的にかかわり、リードしている学生たちは、専攻の学習面でもよい成績を修めているという印象が強い。原理的なレベルでの相関関係を論じていることができるかどうかは分からないが、生き方と関わるテーマをもって学ぼうという意欲のある学生は、学生生活の総体を誠実に充実させようとしており、他の場面においても努力しているという印象がある。価値観も、発達段階も多様であるからこそ生まれてくる、今日の学生のエネルギーというものを、大学づくり、教育改革に組織する観点から

本格的に研究してみる必要があるのではないか。それこそが、ユニバーサル・アクセスの道なのではないかと思うのである。

□ 「学びあいの場」としてのキャンパス実現に向けて

学生参加型教育としての

ピア・システム

アメリカの高等教育においては、ピア・エデュケーションというスタイルがあるということを紹介されている。心理や福祉などの臨床分野において「ピア・サポート」というのがあるように、「ピア（PEER）・エデュケーション」というのは、同じ立場の間どうしが、互いに教育的関わりをもって学びあうことだと理解している。そして、日本の高等教育においても、前節において紹介したような学生実態を見れば、ポテンシャルのある領域なのではないかと考えている。

詳しいことは別の調査が待たれるが、アメリカの大学においては、キャンパスのさまざまな場面で、学生自身がスタッフとしての役割を担っていると聞く。アメリカ合衆国の州立ミズーリ大学で、学生課のスタッフとして八年間、学生相談などに携わった経験のある古宮昇大阪産業大学人間科学部助教によると、例えば、「カウンセリング・セ

ンター」では、大学院生のカウンセラー実習生が多数参加していたり、補習を担当する「ラーニング・センター」でも学生や院生のアルバイト・チューターが中心になって運営しており、さらに「ステューデント・サクセス・センター」や「障害学生支援センター」、「女性センター」、「キャンパス・ポリス」、「ゲイ・レズビアン・バイセクシャル・トランスジェンダー・センター」、「黒人文化センター」などのさまざまな大学のセクションが、学生スタッフ主体で運営されており、これらが、日本の大学という学生部セクションを構成しているということである。さらに、「ピア・エデュケーション・グループ」も多くのグループが活発に活動しており、キャンパスにおいて、キャリア形成、恋愛やレイプ教育、健康と栄養などについての啓発教育を担っており、大学は、これら学生スタッフや学生グループを支援するために、グループ・リーダー育成プログラムを持ち、リーダー資格テスト等も実施しているとのことであった（近畿学生相談研究会第一二一回例会第一部会「米国の大学における学生サービス」報告／二〇〇二年十月四日）。これらの取り組みは、日本の大学において直ちに実現できるものは少ないかもしれないが、きわめて興味深いものであり、筆者自身も一度、本格的に調査してみたいと考え

ている。入学は易しいが卒業は厳しいといわれるアメリカの大学において、それ故かもしれないが、さまざまな学生支援の手立てがあり、それを自主的に、あるいはスタッフとして学生が担うという、ピア・システムが発達しているのである。

日本の大学改革をめくっても、「学びの主体」としてどう学生を育成するかという議論があるが、「学びの主体」となるよう援助される「客体」にすぎないのが、日本の学生の位置づけではないか。この点を転換してみるという挑戦が、そろそろ日本の大学改革において問われていいのではないかと思う。

立命館大学における

学生自治と

ピア・システム

さて、かく言うわが立命館大学においてはどうなのか。総長選挙や全学協議会など、学園の意思決定に学生が積極的に参加することを標榜している立命館大学においても、まだまだ学生参加には課題がある。一事務職員としては分に過ぎるテーマであるが、実践的課題としての紹介も兼ねて、一事例を紹介したい。

本誌『大学と教育』第二十三号にも拙論で紹介しているが、立命館大学には、「オリター制度」というのがある。

「オリター」とは、オリエンテーション・コンダクターの略であると学生自身が説明しているとおり、新入生に対して学生生活の確立を支援する上級生による自主的な取り組みであり、学部ごとに学生自治会が取りまとめているものである。学部によって多少事情は異なる点があるが、だいたい、以下のような内容で活動している。

第一に、一回生のクラス活動への援助である。先述したように、立命館大学では各学部とも、一回生のゼミナールがある。クラス運営のスタッフを選出し、グループワークができるように援助し、レジュメの書き方や討論のすずめ方を伝授する。授業で利用できる設備・備品を紹介し、学内施設の案内もしてくれる、新入生にとっては教員以上に「担任」の役割を果たすような実践がある。第二に、学部レベルでの新入生歓迎行事の企画運営である。学部を中心とした学生生活や学び方の紹介、さらには履修相談会まで行っている。卒業生を招いての進路に関する懇談会や、下宿生活をサポートする情報誌の発行も行っている。第三点としては、これらの取り組みは、単年度ごとに組織されるという、サークルとは異なる学生集団であるということである。「入学したとき、当時のオリターに親切にしてもらっているという助かったので、自分も何かしたい」という

のが、オリター再生産のモチベーションのようである。

このようにまとめてみると、あらためて、アメリカの大学に負けないようなピア・システムの可能性を見ることが出来る。大学としても、一九九一年度の全学協議会において、このオリター活動に対する教学的意義を認め、大学としても必要な援助を行うことを確認しているが、その援助を直接に担当する立場にある筆者としては、さらなる質的な力量形成への支援と、その実践者に対するより一層の正当な評価を行いたいと思っている。

この点では、広島大学保健管理センターの実践が参考になる。広島大学保健管理センターでは、「ピア・サポーター」と称する学生たちを組織し、学生の立場で学生相談を担うという取り組みを、近年、開始している。事前研修はかなり充実したものを用意しているため、学生にとってはハードなようであるが、学生と宗教・カルト、学生生活と健康管理、消費生活に関するトラブル、青少年をめぐる事件・事故・犯罪と自己防衛、大学の諸制度、そして相談力量を高めるためのロールプレイ実習等、「学生生活講座」ともいえるべき、学生生活に関する包括的な研修を用意している。

しかしながらまだまだ課題は多く、教育の手法として、

このオリターのような学生リーダーが学習行為や授業運営の重要な役割を評価されるまでにはいたっていない。現在はまだ、学生生活の導入に積極的な役割を果たしている、というレベルにとどまっている。教員の側に、学生スタッフを活用した授業方法・運営力量が高まっていない（その理由は、学生スタッフの活用は効果があると思っていないことにも理由があり、鶏と卵の関係になっている）が、同時に、学生のほうでも、学生生活や学習への援助が、きわめて個人の経験だけに依拠して行われてしまうという問題もあると思われる。

日本の大学における

ピア・システムの

課題と可能性

これまでに述べてきたことを包括的に言い直せば、日本の大学は、従来、「正課」と「課外」という二極的な枠組みで学生生活が語られており、「正課も大事だが課外も大事」というところに来ているのだと思う。しかしこれからは、「正課」や「課外」といった枠組みを超えて、学生生活の全体像を自ら学びと位置づけてコーディネートできる力量を、学生がどう身につけて、大学はどう支援できるのかが重要になっていると思う。「正課」と「課外」の区分は厳然としてあるのだが、このような意味から、できるだけ「正課」、「課外」と

いう枠組みで大学教育や学生生活を語らないようにしている。

学生の学力低下が各方面で議論されているが、どういふ点で、どういう理由で学力の低下があるのかについては諸説があるが、現実には大学で学んでいる学生たちの「学び」のありようには問題点がある、という点では共通しているとも言えよう。さらに、数年後には、中学校・高等学校において「総合的な学習の時間」を経験した学生たちが入学してくる。努力されている現場の先生方には、十把一絡げで語るとお叱りを受けるものであるが、一部の先進的な実践で高い成果を持った生徒がいるなかで、大半の生徒は、「総合的な学習」を体験してはいても、主体的な学びの自覚的体験はないという、新たな「格差」も予想される。

これらが大学の質を変化させるのかどうか（低下させるのかどうか）は、別の議論に委ねたいが、学生の自立、発達の実態と結んだ大学教育づくりが必要であり、キャンパスづくりが必要である。そしてそれは、必ずしも、学生に対して懇切丁寧なサービスの強化でしか行えないのではなく、学生同士の「学びあい」をどう支援し、高めるかという点にあるのではないか。言い換えると、もはや、大学においても、学級崩壊ならぬ授業崩壊がおこりえるし、入学

時からの授業集団づくり、集団のリーダー育成がうまくいけば高い学習成果がでる、そういった中等教育の方法論が、大学にも通用する時代になってきていると考えた方がよいのではないかと思うのである。

「学生参加型授業」が必要といわれているとおり、正課において、学生の「学びあい」を基調とした教育法は、いまだ主流ではない。一方で、課外活動の分野では、これらが別の目標に向けて活動しているのであって、個々の参加メンバーが学習・成長するということは副次的である。課外活動は、学生の自主的活動として、事実上放任する傾向があるし、学生がそれを望んでいる場合も多い。しかしながら、高校までのクラブ活動の意義に留まらない、高等教育にふさわしい課外教育論にも挑まねばならない。こういった論点を含めた検討を進めないと、大学教育における学生参加は成熟しないと思う。

□ おわりに

「親鸞は弟子一人ももたず候ふ。そのゆゑは、わがはからひにて、ひとに念仏を候はめ。弥陀の御もよほしにあづかつて念仏申し…つくべき縁あればともなひ、はなるべき縁あればはなることのある…」。如来よりたまはりたる信

心を、わがものがほに、とりかへさんと申すにや。かへすがへすもあるべからざることなり。自然のことわりにあひかなはば、仏恩をもしり、また師の恩をもしるべきなり」

親鸞の『歎異抄』の一節である。筆者は一応真宗門徒ではあるが、真宗教学の研究者ではないから、親鸞がどういうコンテキストでこの一説を述べているのかということはい理解できていない。が、教える側と教えられる側との対等で同朋の関係があり、仏（心理）の前ではそれがすべてである、そしてそれにせまる方法は、師が一方的に規定し伝授するというのではなく、それぞれがそれぞれのやり方で念仏を実践するものである、とも言っているのではないかと。とするならば、あらためて今日の教育の基本的なあり方を考える上で、重要な問題提起なのではないかと筆者はきわめて勝手に解釈している。

今日、高等教育の国際的競争は、個々の大学の規模や位置に関わらず、日本の大学全体に迫られているのは、避けられない事実と思わねばならない。その中において、現実の学生に対する教育の問題を、既存の大学の枠組みの中で検討しなければならぬという「しんどさ」をどう克服するのか。私としては、実証性にきわめて乏しいが、本稿で述べてきているように、教育の諸プログラムやキャンパス

づくりのあらゆる部分で「学生参加」を具体化するという発想の転換にあると思っている。今でも、学生の意見の反映を重視しているところはあるだろうが、企画段階における参画にとどまっているような気がしており、基本的なコンセプト自身に「学生参加型」を貫徹することが重要だということである。

文頭に断っているように、本稿は学術論文ではないが、それにしても、印象のレベルでの論述が多く、適切な論文となっていないと、汗顔するしだいである。青年期の発達を社会的に支援する役割としての高等教育のあり方に問題意識をもって、日々の業務を通して考えることをまとめたということでお許しただければ幸いである。